

キュウシュウノウサギ幼獣の逃げ方における若干の知見

橋口修平

〒 897-0215 南九州市川辺町平山 6653 番地 1 鹿児島国際大学福祉社会学部社会福祉学科

Abstract

Three leverets of the Japanese hare *Lepus brachyurus* were observed in Kagoshima Prefecture. The first and second leverets were estimated to be about 12 and 23 days old, respectively, based on their ear lengths. The first and third leverets didn't run away and stayed still by the roadside. The second leveret wasn't fast enough to run away (4–16 km/h), and after that, it stopped running and stayed still. Therefore, because leverets are slow runners, it is speculated that if a predator is approaching, it would be safer for them to be still rather than run away.

はじめに

日本固有種であるニホンノウサギ *Lepus brachyurus* は4亜種に分けられ、鹿児島県ではキュウシュウノウサギ *L. b. brachyurus* (以下、ノウサギ) が生息している (Ohdachi et al., 2015; 山田, 2017). 本県では広域で見られ、一年中繁殖が行われている (谷口, 1980; 船越・西峯, 2012).

南薩地域で春季夜間にノウサギの幼獣を3頭目撃した。鹿児島県における幼獣の観察記録はほとんどなく、新知見となる。また、幼獣個体の逃げ方について若干の知見を得たので報告する。さらに、春季はノウサギの幼獣が捕食者にとって貴重な餌資源になっていると推測されるため、ノウサギと捕食者との関係についても考察した。学名は、Ohdachi et al. (2015) を参考にした。

材料と方法

ホンドギツネ *Vulpes vulpes japonica* (以下、キツネ) を主な調査目的とした夜間ルートセンサスを行っていた際に、ノウサギの幼獣を観察した。

調査地は鹿児島県南九州市川辺町で2024年と2025年の3月に調査を行った。撮影はデジタルカメラ (Nikon COOLPIX P1000) を用いた。耳長については、じっと静止した幼獣に接近し直尺定規 (30 cm) を当てて計測した。測定値を基に耳長の成長曲線 (Yamada et al., 1990) を参考に、日齢を算出した。目撃場所の位置や標高、周辺環境は国土地理院地図を参考にした。

ノウサギ幼獣の逃走速度の計測方法については、その個体の逃げる速さに合わせて車で走行して計測した。道端で採餌している個体の多くの場合、道路に対して垂直方向に逃げるが、路上を道なりに沿って逃げる個体も時折見られた。後者の個体を追跡し、逃走速度 (時速) を自動車の速度メーターで計測した。また、川辺町に生息する中型哺乳類成獣4種ノウサギ、キツネ、ニホンアナグマ *Meles anakuma* (以下、アナグマ) およびホンダヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus* (以下、タヌキ) について、2023年1月から2024年12月に同様の方法で路上 (アスファルト舗装) 個体を追跡し、各種の逃走速度を算出した。

結 果

個体 1 2024年3月2日22時23分、南九州市川辺町本別府 (31.352609°N, 130.367438°E, 標高 68 m) において自動車で行中、路上 (アスファルト舗装) にいたノウサギ幼獣 (個体 1) を発見して徐行したところ、道端に逃げてじっとしていた。路肩に停車して車内からデジタルカメラで画面越しに観察し、撮影した。じっとしたままだったので、車を降りて近づき、幼獣の近くに定規を

Hashiguchi, S. 2025. Some insights into how young Japanese hare escapes. *Nature of Kagoshima* 52: 29–32.

✉ SH: Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, International University of Kagoshima, 8-34-1 Sakanoue, Kagoshima 891-0917, Japan (e-mail: kitsune4813@outlook.jp).

Received: 7 May 2025; published online: 10 May 2025; https://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_052/052-008.pdf



Fig. 1. Dorsal view (A) and side view (B) of the first leveret (Individual 1), estimated to be about 12 days old based on the measurement of ear length (40 mm) in Kawanabe-cho, Minamikyushu City, Kagoshima Prefecture, at 10:23 p.m. on 2 March 2024. Dorsal view (C) and side view (D) of the second leveret (Individual 2), estimated to be about 23 days old based on the measurement of ear length (52 mm) in the same town at 0:37 a.m. on 3 March 2024. Dorsal view (E and F) of the third leveret (Individual 3) inside the ditch in the same town at 11:57 p.m. on 15 March 2025. Scale bar: 50 mm.

置いて撮影した (Fig. 1A, B). その間、体を小さく丸めて全く動かなかった。定規を耳介に近づけて耳長を計測し約 40 mm を記録した。ノウサギの耳長の成長曲線 (Yamada et al., 1990) に当てはめて、生後約 12 日の個体と推定した。また、耳介の内側や付け根に数個体のマダニ類が付着していた。観察時間は約 3 分間であった。

目撃場所の周辺環境 (半径 500 m 範囲内) は、

森林 (主に杉の植林) が約 77%, 水田が約 13%, 畑が約 4%, 荒地やその他が約 6% であった。その域内に人家はなかった。

個体 2 2024 年 3 月 3 日 0 時 37 分、南九州市川辺町野間 (31.426303°N, 130.394146°E, 標高 151 m) において自動車で走行中、路上 (アスファルト舗装) にいたノウサギ幼獣 (個体 2) を発見した。道端に逃げることなく路上を道に沿って

走って逃げたため、徐行して追いかけて速度等を計測した。290 mを4–16 km/hで107秒間ピョンピョン跳ねるように走って逃げていた。途中で1度だけ約3秒間止まったが、それ以外は止まることなく走り続けていた。その後道端に逃げてじっとしたところで停車した。個体1と同様にカメラ越しに観察・撮影し、その後近づいて定規を置き撮影した (Fig. 1C, D)。個体1より大きかった。個体2も体を小さく丸めて全く動かず、耳長を計測したところ約52 mmだった。ノウサギの耳長の成長曲線 (Yamada et al., 1990) に当てはめて、生後約23日の個体と推定した。また、耳介の内側に数個体のマダニ類が付着していた。観察時間は約3分間であった。

目撃場所の周辺環境 (半径500 m範囲内) は、森林 (主に杉の植林) が約59%, 畑が約19%, ソーラーパネルが約10%, 人家が約1%, 荒地やその他が約11%であった。

個体3 2025年3月15日23時57分、南九州市川辺町野間 (31.426618°N, 130.397532°E, 標高141 m) にて自動車で行中、路上 (アスファルト舗装) にいたノウサギ幼獣 (個体3) を発見して徐行したところ、路肩の側溝に逃げ込んだ。側溝内を見るとじっとしたまうずくまっていた (Fig. 1E, F)。側溝の底に定規を置いて撮影したが、耳長を計測することはできなかった。体の大きさは個体1と個体2の間くらいであった。観察中は体を丸めていたが、頭や耳を時折動かしていた。側溝の幅は約60 cm、深さ約60 cmで、上流の方はより狭く浅くなっており脱出できる可能性があったことから、観察後は放置した。水は流れておらず溺死の可能性は無かった。

目撃場所の周辺環境 (半径500 m範囲内) は、森林 (主に杉の植林) が約60%, 畑が約20%, ソーラーパネルが約10%, 人家が約1%, 荒地やその他が約9%であった。

中型哺乳類4種成獣の逃走速度 2024年2月28日22時50分、川辺町本別府においてノウサギが31–37 km/hで27秒間走り、その間、直線状に走ったりジグザグ状に走ったりしていた。計測できたサンプル数は4例で、その逃走速度の平均速度は34.0 km/hであった (Table 1)。

キツネの逃走速度については6例得られ、最も速い個体は、2023年5月8日22時44分、川辺町本別府において40–44 km/hで6秒間かなり全力で走っていて、最も遅い個体は、2024年9月28日22時51分、川辺町本別府において16 km/hで16秒間走っていた。平均速度は28.2 km/hであった (Table 1)。

タヌキの逃走速度については12例得られ、最も速い個体は、2024年10月18日22時46分、川辺町本別府において34 km/hで7秒間走っていて、最も遅い個体は、2024年3月29日22時41分、川辺町本別府において12–16 km/hで34秒間走っていた。平均速度は25.6 km/hでキツネよりも遅かった (Table 1)。

アナグマの逃走速度については11例得られ、最も速い個体は、2023年5月3日22時30分、川辺町高田において25 km/hで10秒間走っていた。最も遅い個体は、2024年11月18日22時48分、川辺町高田において6 km/hで8秒間走っていた。平均速度は17.1 km/hでタヌキよりもさらに遅かった (Table 1)。

考 察

個体1は生後約12日、個体2は生後約23日と推定された。個体3は耳長を計測することができず、日齢を推定することができなかったが、個体1と個体2の中間の日齢と推測された。ノウサギの妊娠期間は46–47日程度とされるため (谷口, 1980)、親個体は12月下旬から1月上旬に交尾していたと考えられる。個体1, 2とも体の大きさが異なっていたこと、目撃場所は約8.5 km離れ

Table 1. Escape speeds of the medium-sized mammals from a car chase.

Species	n	Speed of escape (km/h)
		Mean $\pm$ SD (range)
<i>Lepus brachyurus brachyurus</i>	4	34.0 $\pm$ 2.16 (31–37)
<i>Vulpes vulpes japonica</i>	6	28.2 $\pm$ 9.56 (16–44)
<i>Meles anakuma</i>	11	17.1 $\pm$ 4.83 (6–25)
<i>Nyctereutes procyonoides viverrinus</i>	12	25.6 $\pm$ 7.77 (12–34)

These values were calculated based on the adults in Kawanabe-cho, Minamikyushu City, Kagoshima Prefecture from January 2023 to December 2024.

ていたことやその中間に二級河川である万之瀬川が流れているため同腹ではないと考えられる。

ノウサギ幼獣3頭の逃げ足が遅かったことから、危険が迫っている場合は走って逃げるより天敵がいなくなるまで動かずに待つ方が、安全であると考えられる。一方で、ノウサギ類の成獣は逃走時に最高時速 80 km に達し、長時間でも時速 50 km を維持できる種もいることが知られている(山田, 2017)。今回得られたデータからは 50 km/h 未満であった。サンプル数や個体差(警戒心の程度)、計測機器や状況により得られるデータは大きく左右されることが考えられる。本種は被食者であるため、本県産も全力で走ればトップスピードが 50 km/h 以上いくのではないかと予想され、今後もデータを蓄積していく必要がある。

キツネやタヌキは逃走速度の個体差が大きい傾向があった。これは、警戒心の個体差に起因していると考えられる。また、タヌキはノウサギやキツネよりも走る速度が遅い。その遅さは、タヌキの主食が昆虫類と果実類であり、哺乳類や鳥類の死骸を摂食している(酒向ほか, 2008; Akihito et al., 2016)、これらを積極的に捕獲しないことに関係していると思われる。アナグマは最も遅かったが、本種の爪は鋭く土を掘り起こすのに適していて、主食はミミズ、他に節足動物や果実を摂食している(Ohdachi et al., 2015)。そのため、哺乳類や鳥類の捕食を必要とせず、ゆっくりとした移動に止まっていると考えられる。

哺乳類の狩りまたは逃避の観察や追跡または逃走の速度の計測は容易なことではないが、それらのデータを蓄積することで、被食者と捕食者の

関係や食性についての新たな知見を得ることが期待される。鹿児島県がノウサギの分布南限であり、分布上も興味深い。その視点から本種の特徴を探ることも必要である。

謝 辞

執筆を進めるにあたり、ご指導いただいた鹿児島国際大学国際文化学部名誉教授の船越公威氏、文献調達で協力いただいた筆者の友人で鹿児島大学教育学部生の東 宥任氏、夜間ルートセンサスで得られたキツネ等の轢死体を鹿児島県立博物館に寄贈しているが、日頃からご対応いただいている同館の上舞哲也氏、中峯敦子氏(現、南さつま市立加世田小学校)に心から感謝申し上げる。

引用文献

- Akihito, Sako, T., Teduka, M., and Kawada, S. 2016. Long-term Trends in Food Habits of the Raccoon Dog, *Nyctereutes viverrinus*, in the Imperial Palace, Tokyo. Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A(Zoology), 42: 143–161.
- 船越公威・西峯吉紀. 2012. 鹿児島県産ニホンノウサギの生態と保全について. Nature of Kagoshima, 38: 79–86.
- Ohdachi, S. D., Ishibashi, Y., Iwasa, M. A., Fukui, D and Saitoh, T. 2015. The Wild Mammals of Japan Second Edition, Shoukadoh Book Sellers and the Mammal Society of Japan, Kyoto, 506 pp.
- 酒向貴子・川田伸一郎・手塚牧人・上杉哲郎・明仁. 2008. 皇居におけるタヌキの食性とその季節変動. 国立科学博物館研究報告 A 類(動物学), 34: 63–75.
- 谷口 明. 1980. キュウシュウノウサギの繁殖について. 野兎研究会誌, 7: 1–7.
- 山田文雄. 2017. ウサギ学—隠れることと逃げることの生物学. 東京大学出版会, 東京, 275 pp.
- Yamada, F., Shiraishi, S., Taniguchi, A. and Uchida, T. A. 1990. Growth, Development and Age Determination of the Japanese Hare, *Lepus brachyurus brachyurus*. Journal of the Mammalogical Society of Japan 14: 65–77.